

2020年

アンドレア師のキリスト教美術史講座 受講ノート VI

in 船橋学習センター「ガララヤ」

from 蕨由美の Facebook



アンドレア師のキリスト教美術史講座

In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2020年2月5日

船橋学習センター「ガリラヤ」でアンドレア・レンボ師のキリスト教美術講座「ルカによるイエスの受難と美術」を受講してきました。

ルカの福音書は、4つの福音書の中でも、既に書かれている事柄や物語を「初めから詳しく調べ、順序正しく書き、教えが確実なものであること」(1.1-4)として書かれました。

その続編の「使徒言行録」は、異邦人も対象にした宣教のため(使28-28)との「集大成」の書であり、そして使徒言行録に記された初期の教会の活動の主人公は神から使わされた「聖霊」でした。

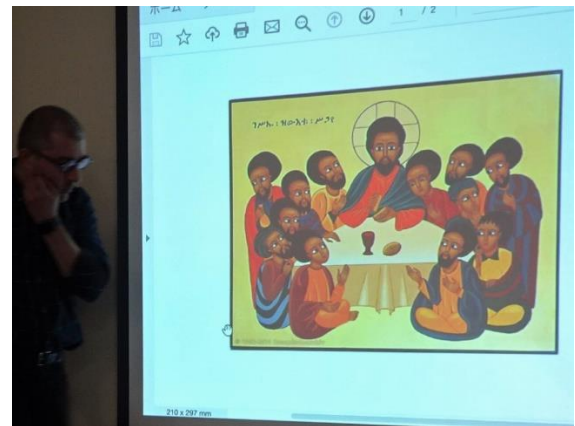
ルカ書は、イエスの初めての言葉として、エルサレム巡礼の際、帰路についた両親が引き返して神殿内のイエスを発見、その時の母の問いに、十二歳のイエスが「父(神)の家にいるのは当たり前」(2-49)と答え、そして最後に十字架上で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」といった言葉、また放蕩息子のたとえ話から、「父」=「神の救い」を強く語っています。

中でも「神の救いのあらわれ」として、「最後の晩餐」はイエス自身のしるしそのものでした。

今回の美術紹介はアイコンからルネッサンス期、そして現代までの「最後の晩餐」がテーマ。中でもエジプトのコプト教会の絵がユニークで新鮮に感じられました。



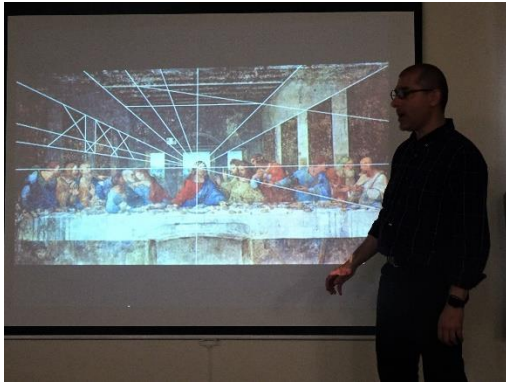
アイコンに描かれた「最後の晩餐」=伝統的なキリスト像、しかし建物や弟子の動きはルネッサンス風。



コプト教会の「最後の晩餐」
テーブルの上はパンと杯のほかにもない。



ダヴィンチの「最後の晩餐」



弟子は3人ずつ4組の構成、
そして視点はイエスに集中する技法。



現代の Sieger Koder の「最後の晩餐」



イエスのお顔は杯の中

2020年9月16日

今日午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師講座「聖書とマルク・シャガール」受講。前回は2月5日、新型コロナの流行で、それ以後の講座が中止となり、7か月ぶりの再開＝再会でした。

この3～4月、アンドレア師の故郷北イタリアのベルガモは、世界中で最も深刻な被害を出した地域でした。灰の水曜日2月26日以降、東京大司教区の教会でもミサ中止の判断がなされる中、故郷ベルガモのご家族とネットで対話しながら、感染爆発と近親者の多数の死とロックダウンの苦しみにおびえる町の人々の悲惨さに向き合ってきた体験談は強いインパクトがありました。

こういう時だからこそ、アンドレア師が親戚との会話の中で聴けた「昨日のパン」の話。

ロックダウンで週2回しか買い物が出ない中、休校で家にいた子供が、こっそりパンを食べると三日前の固いパン、親たちがそういえば、ごちそうの並ぶ誕生日や祝日のパンはなぜか、二日以上たった固いパンだったことを思い出し、曾祖母世代のおばあさんに聞くと、それは「昨日のパンは恵みと感謝のパン」と言われた。世界大戦時、パリからドイツへユダヤ人を送る列車が通過駅のジェノバで夜間停車することがあった。飢えと渇きの声が聞こえる車両に、ドイツ兵から夜だけ警備を任された地元警察官が黙認する中、ジェノバの女たちはパンと水を差し入れた。でもユダヤ人を送る列車が停まるのは不定期。パンを余分に焼いていても、空振りになることもあり、その残って固くなったパンを「恵み」と感謝して、誕生日などに前々日に焼いたパンを食べる習慣があったとのこと。

この前段のお話があったあと、ユダヤ人としてロシアで生まれ、パリで活動、大戦中アメリカに亡命、そのさなか妻のベラに先立たれたマルク・シャガールについて。今日の主題は、そのシャガールが手がけ 1970年の完成したスイスのフラウ

ミュンスター教会の有名なステンドグラスの紹介と、1960年作の「創造」の絵の紹介でした。

そして、アンドレア師は、最後に「パンデミックは天罰」という主張は神を冒瀆している、新型コロナウイルスは「自然と人間の歩み」中のことであり、世界を創造した神は、この世に介入することはせず、介入したのはイエスをこの世に遣わされた時の一回のみ。

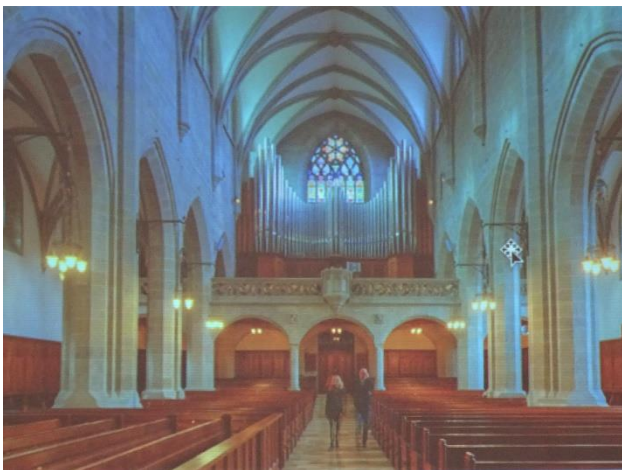
「神は祈りを聞くか」という問いには「祈りは人間の努力」であり、「祈りを通して人間は識別する力を獲得し、行動が生まれる」と述べられ、講座を締めくくられました。

現代の人々に共通した歴史的な体験を通して語られるお話は迫力があり、しばしその余韻が去りそうにありませんでした。



アンドレア師講座「聖書とマルク・シャガール」

そのはじめは、故郷北イタリアのベルガモの新型コロナウイルス感染爆発の時の人々の苦しみや逸話で、ひきこまれました。



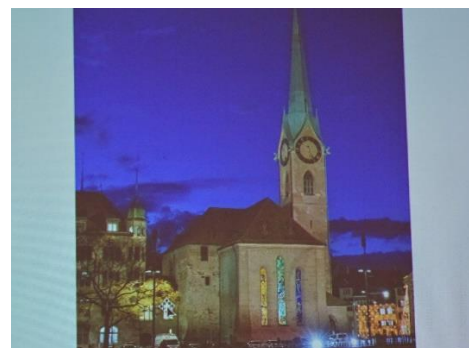
チューリッヒのフラウミュンスター教会
内部後方のスライド



シャガールが手がけた祭壇のステンドグラス



並べてみた画像。両端は、左右の壁側の窓。



夜の教会のスライド。

内部からの光でステンドグラスが美しく、見とれる車事故が多く、往來は車の通行禁止となるそう。



創造バラ窓、チューリッヒのフラウミュンスター教会、1970年

北側のバラ窓「創造」



「創造」シャガール作 パリで（1958-1960）



「天罰論は間違い」「祈りを通して行動が生まれる」と

最後のお話

2020年9月30日

今日は、気持ちのよい秋日和。船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師講座「聖書とマルク・シャガール」の2回目を受講しました。

今日の講義は、前回に続きチューリッヒのフラウミュンスター教会のステンドグラスについて。まずは聖堂の構造と歴史的経緯についての解説から。もとは女子観想修道会の聖堂で、12～15世紀に宗教改革によりプロテスタントの教会用に洗礼盤と説教台が中心的な場所に置くなど改築されましたが、祭壇奥の修道女がミサに与る部屋はそのまま残され、その高い東壁に三つ、南・北に一つずつ設けられた細長い窓のステンドグラスが、20世紀のシャガールの作品となっています。

教会建築は、日が昇る東側に「世の光り」として祭壇を、西側には入り口として「イエスの扉」（「私は羊飼いの門」）が設けられる。フラウミュンスター教会もその例で、朝から夜まで窓から差し込む光で彩られるとのこと。

シャガールはユダヤ教でも厳しい保守主義の教徒で、聖書について深く理解していた。祭壇奥の「預言者の窓」・「ヤコブの窓」・「シオンの窓」・「律法の窓」そして中央の「イエスの窓」の五つの窓は、「救いの歴史の全体」を超自然主義で描いている。

シャガールは十字架をよく描くが、時期によって明暗が異なり、戦争や貧困、暴力の時代では暗いが、この教会の「イエスの窓」は明るい。

一方、北壁のバラ窓は、創世記の創造の物語とノアの箱舟の二つの主題からなる。

光と闇、陸と海の自然界、動物界を段階を追って創造後、神はご自分をかたどって人を創造し、「極めて善し」とされた。

創世記は、第1章が紀元前6世紀のバビロニア捕囚後、第2～3章が紀元前9世紀のソロモンの時代の神話をもとに構成されていて、前者の神は「光あれ」と命ずる霊性のみ神の姿、後者の神は、農夫や陶芸家（泥をこねて人を作る）、医者（アダム

に麻酔をかけ、あばらから伴侶を生み出す) などよく働く人の姿で、具体的である。

二つ目のテーマの「ノアの箱舟」は、理想的な世界から離れていった人類に神は後悔して、新しい創造をする「救いの物語」。

「ジョットの青」を基調としたバラ窓をよく見ると、魚(=イエスの象徴)や人の姿が描かれて、シヤガールのテーマ「神の救いの世界」が見えてきました。

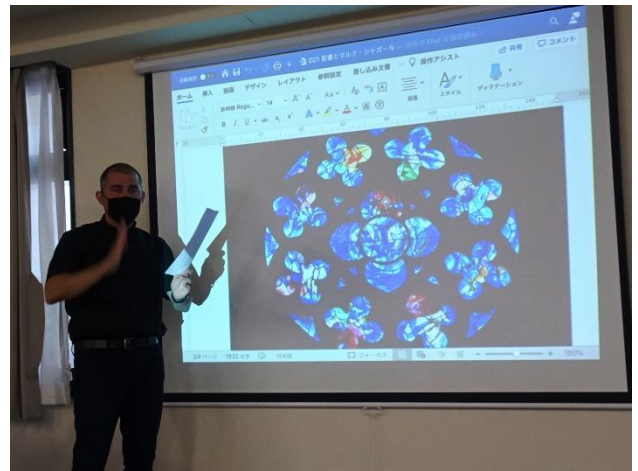
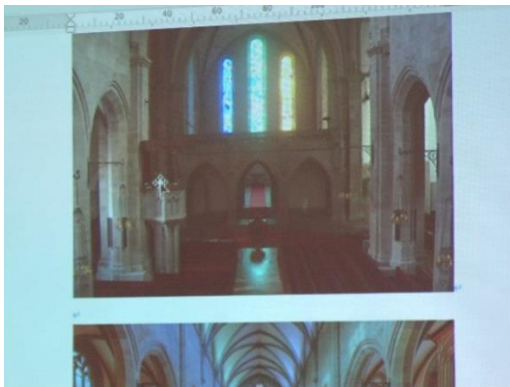
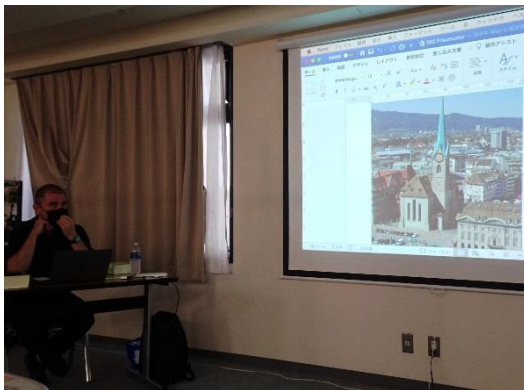


創造バラ窓、チューリッヒのフラウミュンスター教会、1970年

聖書 創世記 1～2.4a 章

- 1日目 光/闇 「善」 4日目 昼の大きな光/夜の小さな光 「善」
- 2日目 上の水/下の水 「善」 5日目 空の群れ/海の群れ 「善」
- 3日目 大陸(自然界)/海「善」 6日目 動物界 (地を這うもの!)「善」
- 神は仰せになった「神のことば」
- 6日目 人間(男と女)神はご自分にかたどって人を創造された 「極めて善」
- 7日目 安息日

聖書 創世記 6-9



2020年10月22日

10月22日は、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師講座「聖書とマルク・シャガール」の3回目。

チューリッヒのフラウミュンスター教会のステンドグラスについて、前回の復習から講座が始まりました。(内容は、9月30日のFBをご覧ください)

祭壇奥の窓は、中央に「イエスの窓」、左に「ヤコブの窓」、右に「シオンの窓」、そして北壁に「預言者の窓」、南壁に「律法の窓」の五つからなる。真ん中は「イエスの生涯」で、信仰宣言に沿って描かれている。「ヤコブの窓」の、旧約のイスラエルの民の祖「ヤコブ」は、天使が上り下りする天まで至る梯子を夢に見て、天の国が開かれていることを示した。「シオン」は、詩編137の出てくるエルサレムの名で、初代教会では「マリア」を「シオンの娘」と呼んだとのこと。

北壁にはバラ窓があり、創世記の創造の物語とノアの箱舟がテーマ。

ここで、創世記と進化論についての質問があり、古生物・地質学者でイエズス会士のピエール・ティヤール・ド・シャルダンの、科学と神の創造、人間の使命についての考え方について詳しい紹介がありました。

神が与えた進化は一つの方向を持つ現象で、進化の中で「知性」を持つ「人間」が生み出された。その最後のステップが「イエスの誕生」であり、神自身が一步完成に進んだ。「自然」は人間に対して良いことも悪いこともするが、意思を持たず、ポルポトにもマザーテレサにもなれるわけではない。それに対して、人間は意思を持ち、神の似姿であり、愛という使命がある。とアンドレア師ご自身の考え方も交えての解説がありました。なお、ティヤールの思想は、第二バチカン公会議後の今の教会では、進化についての一般的な考え方になっているとのことでした。

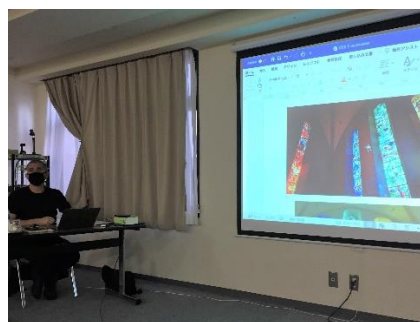
さて、ここで本題のシャガール作品の解説。

北壁の赤い色彩の「預言者の窓」は、左下に、王国が南北に分かれていた時代に、不正に対しての警告の預言を貫いた「エレミヤ」という優れた預言者が描かれている。

その上は火の馬が曳く戦車に乗り天に上る預言者「エリア」の姿を後継者の「エリシャ」が見届けるシーン。そのエリアもエリシャも神の大きな手に守られている。

列王記に書かれたエリアについての苦難とその信仰の叙述は、イエスとその周囲の人々にも影響を与えていて、新約のルカの福音(4章25～と7章11～)に、またマタイとマルコの福音では、イエスの最期の言葉「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」を「エリヤを呼んでいる」と誤解(実際は「詩編」の言葉)した場面などに、その名が登場してくる。

昨日(10/21)の講座はここまででしたが、内容はとても深くて難しく、「列王記」やティヤールの思想を読み込むのに時間がかかり、アップが翌日になってしまいました。



フラウミュンスター教会のステンドグラスについて祭壇奥の5つの窓について、前回の復習から。



左の赤い窓が、北壁の「預言者の窓」



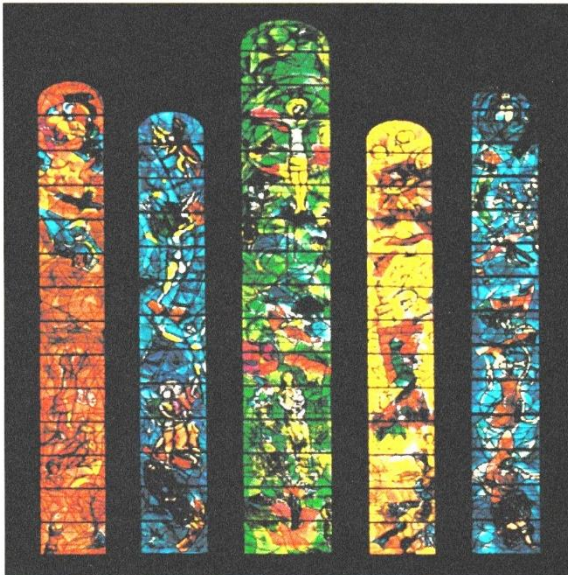
「創世記」の創造の物語とノアの箱舟をテーマにした窓



ティヤールの進化と創造の考え方について語る
アンドレア師

Lembo Andrea, PIME/聖書とマルク・シャガール/2

2

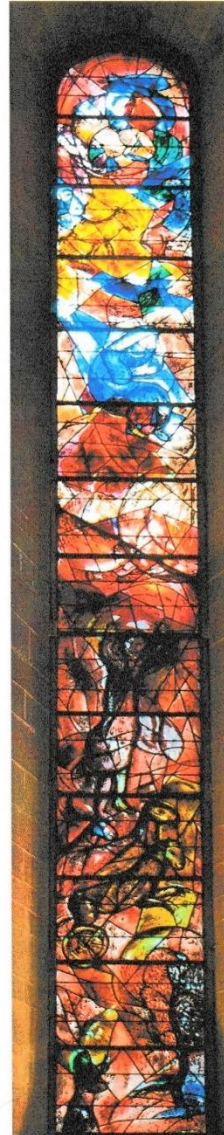


北壁 預言者の窓 ヤコブの窓 東壁 イエスの窓 シオンの窓 南壁 律法の窓

講座資料から

Lembo Andrea, PIME/聖書とマルク・シャガール/2

預言者の窓



律法の窓



講座資料から—2



預言者の窓の下半分 エレミア、
火の馬車で上げられるエリア、そして神の大きな手



司会者の最後のご挨拶

2020年11月18日

今日も暖かな日差しの中、久しぶりの京成電車に乗り、船橋学習センター「ガリラヤ」へ。アンドレア師の講座「聖書とマルク・シャガール」の4回目を受講に行きました。

前回に続き、チューリッヒのフラウミュンスター教会のステンドグラス「預言者の窓」の解説で、ユダヤ教徒であったシャガールが深く読み込んだ聖書の表現を通して、旧約の預言者と律法の意義を説く内容でした。

「預言者の窓」の下部は、預言者エリアがテーマ。エリアは、火の車で天に引き上げられて唯一死ななかつた人。メシアが来る直前にエリアが現れるとされ、エリアはユダヤ人イエスにとってもその模範であり、異邦人のやもめにエリアが遣わされ、その子を生き返らせる故事（列王記上7章）を引き、「郷里では歓迎されない預言者」と自身を重ねて話す場面（ルカ4章）がある。

「預言者の窓」の上部は、預言者エレミヤを描く。エレミヤは正しいものが苦しみ、不正が繁栄する現実に苦悩し、神にその苦しみを訴える。シャガールはその憂いに満ちた預言者の姿を表現している。また迫害されるイエスもまたエレミヤと同じく、神との葛藤に悩む。

危機を説くエレミヤはエルサレムを追放され攻撃される。その姿を念頭に、イエスは、自身を農夫たちに殺され捨てられるブドウ園主の息子にたとえる。（マルコ12章）

「アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください。」よい父なら子を危険にさらすことはないはず。イエスの祈りは神と対立する。「しかし、わたしの思いではなく、みこころのままに」（マルコ14章）、最後は神に委ねることで、救いが現れる。

「預言者の窓」の赤い色彩は、旧約では神の存在を語る色という。

ユダヤ教にとって「人間は二度死ぬ」という。一

度目はこの世から去る時、二度目はこの世から忘れ去られる時である。そのため、死者の名は永遠に残される。キリスト教でも初代教会では最初のミサを「ZIKKARON」をよんだ。死者を忘れないための典礼という意味である。

厳しい試練は現代でも、神との摩擦として立ちふさがる。今年3月、バチカンで一人孤独に神に祈る教皇の姿はその例。ここで、アンドレア神父は、新型コロナに襲われたイタリアの状況などを話してくださいました。

友人の看護師から最近聞いたコロナ渦でのイタリアの逸話。80歳代の男性が罹患して重症となり3日間人工呼吸器を装着して生還した時、50万円ぐらいの治療費請求書を見て、涙を流していた。多額だったのが理由ではなく、彼が言うには「3日間空気を吸ってこの金額。80年間ならいくらに相当するのか、これまで毎日ただで神様は空気を吸わせてくださった。」

今日の講座は、旧約の預言者の姿を通して、新約聖書の読み方を新たにするお話でした。

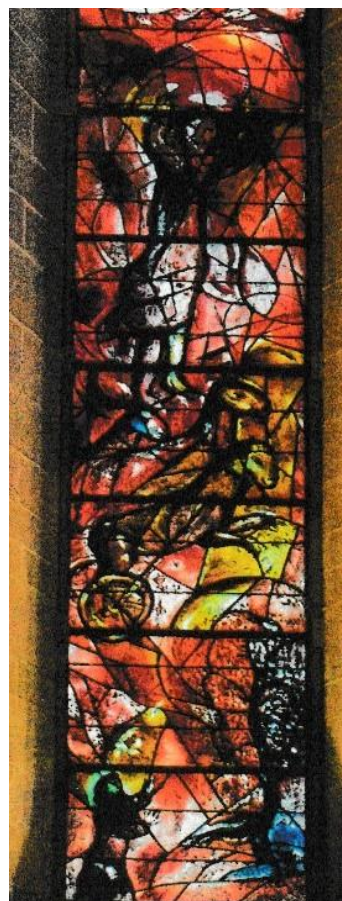


シャガールの「預言者の窓」(左)と「律法の窓」(右)



「預言者の窓」上部

青く描かれる人物は預言者エレミアの憂い悩む姿



「預言者の窓」下部

火の車に寄って天に引き上げられるエリア、それを包み上げる神の手が表現されている。



ユダヤ教にとって「人間は二度死ぬ」、二度目はこの世から忘れ去られる時。

「ZIKKARON」とは死者を忘れないこと。

2020年12月2日

今日は、小雨降る肌寒い一日でしたが、船橋学習センター「ガリラヤ」へ、アンドレア師の講座「聖書とマルク・シャガール」の5回目を受講に行きました。

今回の講座は、チューリッヒのフラウミュンスター教会のステンドグラス「預言者の窓」の続きと「律法の窓」の解説でした。

「預言者の窓」に描かれた預言者（エリアとエレミア）は、危機に際して正しい神の言葉を宣べるが故に、迫害を受け苦しみ、その姿に神も苦しむ。最上部は、体を丸めてうずくまった貧しい神の姿を現しているとのこと。

青い色彩の「律法の窓」は上中下の三段構成になっていて、下段は、イザヤ書（52-7）の「良い知らせを伝える者の足は美しい。共に喜び歌え。すべての者が、神の救いを見る。」の言葉を表した踊る女性、赤子、創世記のヘビ、そしてロバが描かれる。ロバは異邦人、即ちすべての人の象徴で、イエスは小ロバに乗ってエルサレムに入城する。

中段は、シャガールの見方で、ユダヤ人の代表としてのイエスを描く。ルカ伝（4-16～19）の一節、「イエスは預言者イザヤの巻物を開いて読まれた。『主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれた。主の恵みの年を告げるために。』」イザヤの予言は、イエスの身で実現された。

上段は、「出エジプト記」（20章）の、十戒を受けられたモーゼの姿。キリスト教の掟は「互いに愛し合いなさい」であるが、ユダヤ教では614のルールがあり、そのうち365は一年の日数、残りの249は人間の骨の数という。すべての時間と体を支配する律法は、メシアが現れる前の救いであった。

十戒の偶像の禁止は、ユダヤの歩んできた歴史。エジプトでのファラオとその神々による抑圧の苦難の日々が背景にある。

モーゼは、金の耳輪を集めて鑄造した子牛の像を

拝む民に向かって「怒り」に燃え石板を投げつけた。(出エジプト記 32-19) この「怒り」が「角」と同音異語であったので、モーゼの頭には角が表現されるという。

人は偶像を造り、独裁者はそれを使う。神の救いは無償であるのに、現在社会では「お金」を偶像として拝んでいるのではないかとアンドレア師は、語られました。



「律法の窓」の下段

慶び踊る女性・赤ちゃん・そしてヘビ



律法の窓

↓下部



「律法の窓」

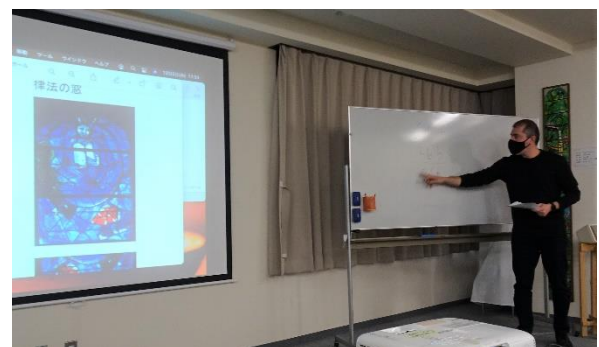
左上 最上段の窓、十戒の石板を示すモーゼの姿

左下 中段、ユダヤ人シャガールにとってのイエス

右 下段、踊る人、赤子、ヘビ、ロバ



「預言者の窓」最上部、うづくまる神の姿



モーゼの姿と、614の律法の数。

うち 365 は一年の日数、249 は人間の骨の数